

浜名湖の自然



加藤 弘行先生

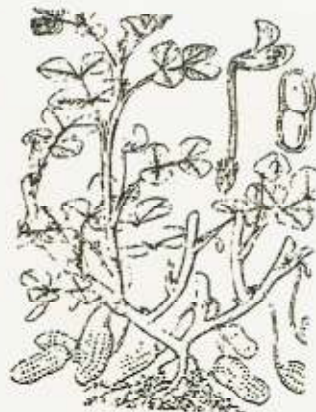
らっかせい

今回は、「らっかせい」を紹介します。漢字では「落花生」です。誰でも知っているこの植物は南米原産と考えられており江戸時代に日本に入ってきたようです。

この植物のおもしろさは何といっても実の付き方です。あさがおでもりんごでもひまわりでも実（種子）は花が咲いたところに付きます。ご存知のように、らっかせいの花は黄色のかわいい花で地上10cm位のところに咲きます。しかし、種子であるピーナッツ豆は、土の中に出来ず。落花生という名前はこの不思議さから付けられたものなのです。「地上に咲いた花が落ち、土の中に子供（種子）が生まれる不思議な植物」と考えての命名です。この仕組みはどうなっているのでしょうか。実は、ピーナッツ豆は根に付いているではありません。花の子房の下（付け根）の部分が伸びて槍のように伸び地中に突き刺さり、その先にピーナッツ豆が付いているのです。ですから、槍の付け根には、花の一部である「がく」が残っています。花の一部が伸びたのですから、ピーナッツ豆が付いている部分と根とは当然違います。農家が収穫するとき観察させてもらうと違いがよくわかります。今、舞阪町内には、落花生を作っているところがかかりあります。農家の方をお願いして、槍の先を地中から抜いてみるのもおもしろいです。槍の先に実が付いています。豆の仲間ですから、殻の中に種子（ピーナッツ）が入っています。これは「大豆（枝豆）」や「えんどう豆」と同じです。観察される場合は是非「がく」の存在も確認してください。また、この実は地中でないと生育しませんので、観察した後は地中に戻してください。

まめ科の植物は根粒菌と共生しています。まめ科の植物は根粒菌から窒素を栄養としてもらい（根粒菌は空気中の窒素を栄養分に変えることが出来る）タンパク質を作っています（だからまめ科の植物はタンパク質を多く含む）。

春先に、田にれんげを撒くのも、「れんげ（まめ科）」のこの特徴を利用したものであり、れんげを稲の窒素肥料として使うためです。落花生に限らず、まめ科の植物の根を観察してみてください。1～2mmの白い粒が根粒菌です。



ラッカセイ